

ヨハネによる福音書 「肉（人）となった神」

司祭 ヨハネ 井田 泉

「ヨハネによる福音書」は他の三つの福音書とはまったく趣が異なります。

「1:1 初めに ^{ことば}言があった。言は神と共にあった。言は神であった」

という不思議な語りから始まります。この福音書は、ギリシャ思想の影響のもとにある人々に対してイエス・キリストの意味を説き明していくことに目的があった、と言われます。難解な謎の書のようなのですが、その謎が一つずつ解けるたびに、そこから恵みの光が差し込んで、わたしたちに自由の息吹が起こります。それがヨハネ福音書の魅力です。

「マタイ（あるいはマルコ、ルカ）のイエス像が人間的に描かれているのに対して、ヨハネのイエス像は超越したものとして描かれ……」と説明されることがありますが、そのような割り切り方にはわたしは賛成しません。ヨハネ福音書における人を超越した存在としてのイエスは、同時に肉体を持った、悲しみ、憤り、愛し、心を騒がせ、血を流して死ぬ存在、人間そのものです。

わたしたち、とりわけ聖公会の信徒は、礼拝の中で「ニケヤ信経」という古代教会以来の信仰告白を唱えます。その中にイエス・キリストについて「主は神よりの神、光よりの光、まことの神よりのまことの神」という箇所があります。つまり「イエス・キリストは神である」とわたしたちは告白しているのです。わたし自身も、伝統的な教会の立場に従い、イエス・キリストを「まことの神でありまことの人である」と信じて受け入れています。

ところでヨハネ福音書の中にこのようなイエスの言葉があります。

「あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが、聖書はわたしについて証しをするものだ。それなのに、あなたたちは、命を得るためにわたしのところへ来ようとしなさい。」 5:39 - 40

それでわたしたちは、イエスその方に近づき、この方のところに行き、その命に触れることを願いつつ、このしばらくの時を過ごしたいと思います。

1. プロローグ——神の ^{ことば}言の受肉

「1:4 言の内に命があった。命は人間を照らす光（原文は「人間の光」）であった。

9 その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。

11 言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。

14 言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」

このようにヨハネ福音書は、クリスマスの出来事（イエス・キリストの降誕）を独特の仕方です。光の到来。人を生かす命の光の到来です。この光を受けて、わたしたちは照らされ、温かくされ、命を取り戻し、闇の中に道を見出します。

「1:11 ^{ことば}言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。」

人の光として来られた方、神の愛の語りかけ（言）そのものであるこの方は、ご自分の民に拒まれる。すでにこのプロローグで、イエス・キリストが受ける迫害、受難が述べられています。しかしそれを覚悟し引き受けつつ、神の子は人となって来られました。

「1:14 言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。」

「肉」σάρξ（サルクス）とは人間を言い表す言葉です。それも「弱さ」「はかなさ」「傷つきやすさ」、また場合によっては「罪深さ」「神への無理解あるいは反抗」というニュアンスがあります。

旧約聖書・創世記には次のような神の嘆きのつぶやきが記されています。

「6:3 主は言われた。『わたしの霊は人の中に永久にとどまるべきではない。人は肉にすぎないのだから。』」

しかしそれでも「肉」としての人間は、神が創造し愛し、また求めておられるものでもあります。「肉」とは「汗と涙と血を備えた人間」と言っていていいでしょうか。

「1:14 言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。」

というヨハネの証言には、神がそのような人間性をご自分のものとして引き受けられたという、人間に対する極みまでの愛がこめられています。

「1:14 言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」

ヨハネ福音書は、「わたしたちが見た」その出来事を指し示し、わたしたちにもそれを見つめるようにと呼びかけています。

2. 世の罪を取り除く神の小羊——洗礼者ヨハネ

ここから、ヨハネ福音書の叙述の順に沿って、イエスを見た人、イエスと出会った人たちが、イエスを何と見、何と呼んだかをいくつかたどっていくことにします。ヨハネ福音書の中には「信じる」「信じた」という言葉がたくさん出ています。けれども「信じる」「信仰」というのは、無理に強制的に型にはめられるというものではありません。イエスとの出会いによって、呼び覚まされ、その人の内側から溢れ出てくるもの。「状態」というのではなくむしろ出来事です。信仰とは出会いによって与えられるもの、「出会いの賜物」だ、と理解したいのです。

まず取り上げたいのが洗礼者ヨハネです。

「1:29 その翌日、ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て言った。『見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。』」

イエスが自分のほうに来られる。自分を目指して、自分に向かってイエスが来られる。それをヨハネは見ました。このヨハネはイエスの弟子のヨハネではなく、洗礼者ヨハネ、イエスに洗礼を受けたヨハネです。ヨハネははっきりとイエスを知り、言葉が口を突いて出ました。

「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」

この方が世の罪を取り除かれる。そのためにこのイエスは、自分の命をささげ、血を流して、

死なれる。この方の生涯と死を通して、この世界と人間のほんとうの救いが実現する。ヨハネはイエスを見てそのように感じ、認識し、それを言葉として発しました。

イエスを「**世の罪を取り除く神の小羊**」と呼んだのは、洗礼者ヨハネの勝手な想像ではなく、単なる直感ではなく、事実そうであることをまっすぐ正しく理解した、認識した、ということだ。 「信仰とは認識である」——これはわたしが最も影響を受けたスイスの神学者カール・バルトから教えられたことですが、信仰とは、言わば心の目が開かれ、心の耳が開かれて、神を、イエス・キリストをはっきり知ること、認識することです。

洗礼者ヨハネは、すでに 30 年後のイエスの十字架の死を見ていた。洗礼者ヨハネはイエスを指さして、わたしたちもご自身の命をささげて死なれるイエスを見つめて知るようにと促しています。この礼拝堂の後ろに白い大理石の洗礼盤があります。その側面には、神の小羊の姿が刻まれています。

3. どうして、そんなことが——ニコデモ

ある夜、ニコデモというかなりの年配の人がイエスを訪ねてきました。ユダヤ人の七十人議会の議員でもあり、名の通ったユダヤ教の教師でした。「夜」に来たのは、人目をはばかったのかもしれない。危険人物視されているイエスに会うのを、おそらく彼は人に知られたいくなかった。けれどもニコデモはどうしてもイエスに会いたかった。彼は自分のうちに、解決できない闇を抱えていたのかもしれない。

ニコデモは、何の社会的地位も立場もない、自分よりはるかに若いイエスに対して丁重な態度をとり、こう言います。

「3:2 ラビ、わたしどもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におられるのでなければ、あなたのなさるようなしるしを、だれも行うことはできないからです。」

これに対してイエスはいきなり厳しい返事をします。

「3:3 はっきり言っておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」ニコデモは言います。

「3:4 年をとった者が、どうして生まれることができましょう。もう一度母親の胎内に入って生まれることができるでしょうか。」

おそらくイエスは、ニコデモの抱えている深い悩みを見てとられたのでしょう。同時に、彼のあり方そのものが大きく変えられる（「新たに生まれる」）ことによってしか解決がないことを、はっきり認識されたのでしょう。イエスは、ニコデモの本質のところを突かれました。

「3:5 はっきり言っておく。だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない。」

その後のやりとりでニコデモはこう言います。

「3:9 どうして、そんなことがありえましょうか。」

ニコデモのプライドが邪魔をして、イエスを受け入れることができませんでした。自分の誇り

を傷つけられた思いで、彼は帰って行ったのでしょう。けれども彼は、イエスが自分の最も深い所に触れたことをどこかで感じていました。やがてイエスを捕らえて裁判にかけようとする動きが表面化したとき、ニコデモは微妙な表現ながらイエスを擁護するかのような発言をして、強い反発を受けることになりました（7:50-52）。

ニコデモはさらにもう一度ヨハネ福音書に登場しますが、これは後ほど触れることにします。

4. 信じ、また知っています——ペテロ

さてイエスの評判は次第に広がり、付き従う弟子たちの数も大きくなっていきました。そうした中で、自分たちの目的のためにイエスを利用しようとする動きも起こってきました。その一つ。人々はイエスを王にするために連れて行こうとしました。イエスはそれを知って、ひとり山に退かれました（6:15）。

イエスの願いは、ご自分を信じる人々に自分の命を提供することでした。それはイエスの深い愛からの願いです。そのことをある時期、人々にはっきりと伝えられました。場所はイエスの働きを中心地、ガリラヤ湖北岸のカファルナウムの会堂です。

「6:51 わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。」

これを聞いた人々の中に反発、冷笑が起こりました。弟子たちの多くの者もこれを聞いて、「実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか。」（6:60）
と言って離れ去って行きました。イエスを信じる群れは崩壊・離散の危機に瀕したのです。

「6:66 このために、弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった。67 ここで、イエスは十二人に、『あなたがたも離れて行きたいか』と言われた。68 シモン・ペトロが答えた。『主よ、わたしたちはだれのところへ行きますか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。69 あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています。』』

「わたしたちは信じ、また知っています。」 少し詳しく言いますと、この「信じ、知っています」というギリシャ語の原文は「完了形」(perfect) という時称(時制) が用いられています。これは過去の動作が今やもう完成・完結してしまっている、というニュアンスです。他の人たちがどうであれ、わたしたちはもうあなたを神の聖者であると信じて、知って、そのことはもう動かしようがない。あなたのところに来たわたしたちは、もうここに来てしまっているのであって、どこへも行きようがない。あなたのもとに踏みとどまる以外にない——そういう覚悟と決意がこの言葉の中にこめられています。少数者になったことによって、かえって残された弟子たちの中に真剣さと真心と愛が湧き起こったのです。

ところでわたしたちは「わたしは、天から降って来た生きたパンである」というイエスの言葉のとおり、この礼拝堂に来て、聖餐式で毎週イエスの命であるパンをいただいています。あの時の弟子たちの真剣さと真心と愛が、イエスに向かって溢れるようでありたいと願います。

5. 主よ、信じます——癒された盲人

さてあるとき、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられました。弟子たちがイエスに尋ねます。

「9:2 ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」

これが当時の常識的な考えであったようです。因果関係で説明して納得しようとする。苦しみの中にある人に、さらに「罪のせいでこうなった」と、不当な苦しみを負わせるものです。イエスは答えて言われました。

「9:3 本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。」

「罪を犯したからではない」とイエスは断定されました。因果応報の考えを完全に否定されたのです。さらに、この人が目が見えないという現実からこそ、神のよき業が現れる。イエスがそう言われるとき、それは一時的な気休めではなく、必ずそうなる。イエスがそのように導かれるのです。イエスはその人に「シロアムの池に行って洗いなさい」と言われました。その人は言われたように行って洗い、目が見えるようになって帰ってきました。近所の人たちや、以前から彼が物乞いをしているのを知っていた人たちは、彼について「これは座って物乞いをしていた人だ」とか、「いや、違う」とか、あれこれ言っています。それまでずっと沈黙していたこの人が初めて口を開いて言います。

「9:9 わたしがそうなのです」 *ἐγώ εἰμι* (エゴー・エイミ I am)

この訳し方はちょっと丁寧すぎる。「わたしだ」でいいと思います。これはしばしばイエスがご自分について言われる言葉と全く同じ(18:6 ほか)で、「わたしはある」とも訳せる言葉です。この一言を発したことで、彼は自分自身の主体性をはっきりと取り戻したと思えます。

ところでこの人の話はこれで終わりではなくて、ここから本格的に始まります。この人が目が見えるようになったのは安息日で、礼拝の日、働いてはいけないとされる日でした。それで、この治療行為を行なったのは安息日の掟に違反している。やったのはだれだ、という追及が始まりました。彼はファリサイ派の人々のところに連れて行かれて、事情聴取を受けます。「お前は目を開けてくれたというその人のことをどう思うのか」と問われて、彼は

「9:17 あの方は預言者です」

と答えました。あの方イエスから神の声が聞こえる、ということです。しかしいよいよ追及は厳しくなり、彼の両親までが尋問されることになりました。しかし両親はイエスに味方するような発言をすれば危ないと感じて、「もう大人ですから本人に聞いてください」と言います。

目が見えるようになった人は再び呼び出されて、まるで自分が悪いことをしたかのように追及されました。

「9:24 神の前で正直に答えなさい。わたしたちは、あの者が罪ある人間だと知っているのだ。」

脅迫です。「イエスが悪い」と言わなければ自分の身が危ない。しかし彼は自分がイエスから受けたことを大切に思ってそこに踏み留まり、イエスを悪く言うことはできず、反対にこう言い

ました。

「9:33 あの方が神のもとから来られたのでなければ、何もおできにならなかったはずです。」

イエスを「神のもとから来られた方だ」と言ったのです。取調べる側は憤りと憎しみにかられてこう言います。

「9:34 『お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか』と言い返し、彼を外に追い出した。」

ものすごい差別意識です。こういう人たちが力を持っている。彼は信仰共同体から追放されました。イエスとの出会いの経験を大切に保って、イエスを擁護した結果、両親もかばってはくれず、言わば村八分状態となったのです。一方イエスは、この人が追放されたことを知って、彼を探しておられました。

「9:35 イエスは彼が外に追い出されたことをお聞きになった。そして彼に出会うと、『あなたは人の子を信じるか』と言われた。」

「彼に出会うと」と訳されていますが、「彼を見つけて」というのが直訳です。イエスは彼のことを心配して探して、そして見つけられたのです。今初めて、彼は見える目で、肉の目でイエスを見ています。この方と出会って、この方を信頼して、この方に感謝して、脅迫されながらも「あの方は預言者だ」と言い、「神から来られた方だ」と言いました。このイエスのゆえに、彼は恐ろしい目に遭い、孤立させられたのです。しかし彼は真実と真心を捨てませんでした。

今彼は、最も会いたかった方の前にいて、その方の愛の光に包まれています。預言者、神から来られた方、否、それ以上の方に違いないのです。その方が言われます。

「あなたは人の子を信じるか」

「人の子」とは救い主の意味です。

「9:36 彼は答えて言った。『主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたいのですが。』

37 イエスは言われた。『あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ。』 38 彼が、『主よ、信じます』と言って、ひざまずくと……」

「ひざまずく」と訳された言葉は *προσκυνέω* (プロスキュネオー) で、元々は「ある人の所に進み出て、その足もとなどに口づけする」という意味だそうです。それが「礼拝する」という意味を持つようになりました。彼はイエスの愛の呼びかけを受け、深い愛と尊敬をもって心の底から「主よ、信じます」と告白し、イエスを礼拝したのです。

イエスは最初に「9:3 本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。」と言われました。そのとおりに、この人の神の業が現れました。ただ彼が視力を回復したということだけが神の業ではありません。彼が自分自身の主体性を取り戻し、脅迫と迫害にさらされつつ真実を貫き、イエスと出会い、イエスを「人の子」救い主として信じて告白し、礼拝するに至った——この全体をとおして神の業が現れたのです。

6. 世に来られるはずの神の子——マルタ

エルサレムの近郊、ベタニアの村にマルタ、マリア、ラザロの3兄弟姉妹が暮らしていました。

彼らはずっとイエスの働きを支えてきた、特別にイエスと親しい家族でした。イエスのところに知らせが届きました。ラザロが重病で命が危ないというのです。それを聞いて 3 日目にイエスは「もう一度、ユダヤに行こう」と言われました。ラザロの所に行くということです。弟子たちは反対しました。

「11:8 ラビ、ユダヤ人たちがついこの間もあなたを石で打ち殺そうとしたのに、またそこへ行かれるのですか。」

しかしイエスの決意は固く、「わたしは彼（ラザロ）を起こしに行く」と言われます。すでにラザロが死んだのをイエスは知っておられました。そのとき 12 弟子のひとりトマスが言いました。

「11:16 わたしたちも行って、一緒に死のうではないか」

トマスは寡黙な人です。ラザロ危篤の知らせが届いて以来、イエスがどうされるかをずっと気にしていました。イエスが「行く」と言われたとき、「ああ、この方は自分の命を捨てる覚悟で行かれる。それほどラザロを愛しておられる」と感じました。このイエスのためなら、このイエスと一緒に、自分たちも一緒に死んでよい、とトマスは思ったのです。トマスは寡黙にして冷静、しかし純粋で内側に熱い思いを持った人です。

ラザロの姉のマルタがイエスを迎えに出て言いました。

「11:21 主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに。」
マルタはイエスとの対話の末にこう言います。

「11:27 主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております。」

このマルタの信仰告白は、ペテロの信仰告白と並ぶ重要なものです。この「信じております」も先ほどの「完了形」が使われています。あなたを信じたことは絶対に揺らがない。

この後、イエスはマルタ、マリア、また一緒に来た人たちとともにラザロの墓に行きます。その途中イエスは激しい感情を湧き立たせ、また涙を流されます。その後、イエスは大声でラザロの名を呼び、復活させます。

ラザロの話はイエスの受難物語に続いていきますが、今回は大事な受難物語に言及する余裕がありません。ただ注目しておきたいのは次の言葉です。イエスの死の直後の場面です。

「19:33 イエスのところに来てみると、既に死んでおられたので、その足は折らなかつた。」

34 しかし、兵士の一人が槍でイエスのわき腹を刺した。すると、すぐ血と水とが流れ出た。」

イエスのわき腹から「血と水とが流れ出た」という記述は、あのプロローグの

「1:14 言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。」

という言葉の思い出させます。神の言葉、神の子イエス・キリストは、まさに肉体を持った人間として生きて死んだ。その苦難の死の中に、ヨハネ福音書記者は神の栄光を見ているのです。

そしてイエスの遺体を取り降ろす場面に、あのニコデモが登場します。「**没薬と沈香を混ぜた物を百リトラばかり持って**」（19:39）イエスを葬るために来たのです。こうしてニコデモは、自分がイエスの仲間、イエスの弟子、イエスを信じる者であることを人前に示したのです。ニコデモはかつてイエスが言われたとおりに、新しく生まれた者となって神の国を見えています。

7. わが主、わが神——トマス

イエスの十字架の死から 3 日目の日曜日、イエスは弟子たちのところに来られました。そのときトマスはそこにいませんでした。こう記されています。

「20:25 そこで、ほかの弟子たちが、『わたしたちは主を見た』と言うと、トマスは言った。

『あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。』

トマスは真実のものによって生き、真実のものによって死ぬ人です。一時的興奮や確かな根拠のない思い込みでは生きて行けない人でした。人はトマスのことを「疑い深いトマス」と呼んできましたが、むしろ「ひたすら真実を求めたトマス」なのです。そのゆえに彼は、信じられないものは信じられない。けれども自分だけがイエスに会えずに置き去りにされたのだとしたら、どんなに悲しいことでしょう。

しかしこのトマスを目指して、イエスは来られたのです。イエスはあのラザロが死んだときトマスが言った言葉を覚えておられたはずです。

「11:16 わたしたちも行って、一緒に死のうではないか」

真実を切望するトマス、心の奥底に真心と愛の火が燃えているトマスを、イエスは愛しておられました。

「26 さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。

27 それから、トマスに言われた。『あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。』 28 トマスは答えて、『わたしの主、わたしの神よ』と言った。」

けっしてトマスを見捨てないイエスの愛の呼びかけがトマスの心と体を捕えたとき、トマスのイエスへの思いが、同時にはっきりとイエスを知ったその認識が、言葉となって溢れ出しました。トマスは、イエスのうちにはっきりと神を見たのです。

「わたしの主、わたしの神よ」

トマスはイエスを「わたしの神」と呼びました。

ヨハネ福音書は冒頭、プロローグにおいて「(神の)言葉が肉(人間)となった」と宣言しました。そして終わりのほうでは、トマスをとおして、「人間イエス・キリストが神であった」と告げるのです。わたしたちの傍らに来てわたしたちのために涙と血を流してくださる方イエス・キリストが、同時にわたしたちの救い主であり、わたしたちを究極的に救う神である——ヨハネ福音書はそのような不思議な響きを聞かせます。

しかしニコデモがそうであったように、招かれたわたしたちはそれぞれの時間とプロセスを経て、やがてイエスのもとに行く。一度にわかる必要はない。ある箇所がほどけてきて、自分と何か深く関係してくる。それがヨハネ福音書の魅力です。イエスはわたしたちを愛し招きつつ、待っておられます。